



## 患者さんの負担が少ない手術も腰痛を取り除く治療法の1つです

札幌円山整形外科病院 医長 **小熊 大士** 先生

### 治療することで、日常生活の幅が広がります

中高年の腰痛・しびれの原因の1つが、腰部脊柱管狭窄症です。その典型的な症状は、歩いているうちに下肢のしびれ・痛みが出てきて、休み休みでないと歩き続けられなくなる「間欠跛行」という症状です。これは、加齢に伴って起こってくる自然な「からだ（脊柱管）の変化」とも考えられますが、だからと言って「年だから仕方ない」とあきらめる必要はありません。

腰部脊柱管狭窄症は、内服薬などの保存的治療で症状が緩和されるものから手術によってさらに症状を緩和できるもの、緊急に手術が必要なものまでさまざまです。

通常は、まずプロスタグランジン E<sub>1</sub> (PGE<sub>1</sub>) 製剤という血流を改善する内服薬を中心とした薬物治療やリハビリテーションなどの理学療法で治療を始めます。症状が強い場合には、ブロック注射などを行う場合もあります。以上が「保存的治療」と呼ばれる治療法の数々です。それでも「納得のいく改善が得られない」、「もっと、たくさん歩けるようになりたい」など、強い希望があるときには、手術の可能性を相談してみたいかがでしょうか。いろいろな治療法を私たち医師に相談することは、自分自身で納得のいく治療法を見つけることにもつながります。最終的に手術をするかどうか、その選択は患者さんにあります。

### 私は、患者さんの負担が少ない「低侵襲手術」を積極的に取り入れています

腰部脊柱管狭窄症の手術の目的は、神経への圧迫を解除すること、乏しくなっている神経への血流を再開させてあげることです。

ただ、狭くなった脊柱管を手術で広げることができても、神経症状が重い場合などは完全に症状を取り去ることができないケースもあります。また、手術に伴って合併症などのリスクがまったくないわけではありません。そこで、手術のメリットだけでなく、デメリットの部分についても十分な説明を受け、それらを理解し、納得してから手術を受けることが重要です。

従来の脊椎手術は背中を大きく切るため背筋力が

低下し、狭窄した脊柱管を広げることができても腰のだるさが残る点がネックでした。私自身、10年ほど前に背中を15cm切る手術を受け、術後は痛かったですし、背筋力も低下して腰もだるくなる経験もっています。もし、自分がもう一度手術を受けるなら可能な限り必要最小限の切り口で済む手術（低侵襲手術）を選択したいと思いました。これが、私が低侵襲手術を積極的に行うことになった最初の動機です。

現在、手術技術や機器の発達によって安全で侵襲度（切り口や方法）の少ない手術が可能となっています。侵襲度が低い手術は、従来の手術方法と比べて患者さんの負担が少ないため回復も早く、合併症のリスクも低くなります。メリットのある手術方法だと考えています。

### 腰部脊柱管狭窄症の患者さんには、精神面のサポートも重要な治療です

長期間の痛みや歩行障害に悩まされ、満足のいく日常生活が送れない腰部脊柱管狭窄症の患者さんたちは、統計的にみても精神的に落ち込んでいることが多いことが分かっています。X線などの画像所見や診察結果は同じでも、それぞれの患者さんが抱えている問題は異なります。

私は、時間をかけて患者さんの話をよく伺い、可能な限り患者さんごとの生活背景を把握しながら最適な治療法を提供していきたいと心がけています。



患者さんが元気な毎日が送れるように患者さんとスクラムを組む気持ちで診療室でお待ちしています。